

気になる観光地のごみ事情

観光立国、人が来る！
ごみも来る？～

日本工営(株)環境事業部、
地域整備部 専門部長 そえ だ しゅん ご 副田 俊吾



1 はじめに

観光とごみについて語れることは、なんて幸せなことなんだろうと思う。平和で豊かな社会だからこそ、観光を楽しむことができるし、ごみを社会問題として捉えるゆとりも生まれるのかな、と思うからだ。私は仕事柄、途上国を訪れることが多いが、ごみ問題で苦勞しているそれらの国の仲間達には「ごみ問題に取り組めるということは、豊かになりつつある証拠ですよ。いろいろと大変だけど、ごみ問題の解決は豊かな社会形成パズルの最後のピース、さあ、完成させましょう！」とよくいっている。観光地のごみ問題も同じで、ごみ問題が顕在化している観光地は成長している証拠。その解決の向こうには観光地の明るい未来が輝いているはず。

とはいえ、現実はなかなか厳しいところもありそうだ。

本稿では、筆者が学会誌第26巻第3号特集「観光とごみ」で記した「観光地のごみ処理対策事例」(以下、学会誌)について再度概説するとともに、実際に訪れたいくつかの観光地の実態や取り組みについて紹介してみたい。

2 観光ごみの影響

観光客由来のごみ、いわゆる「観光

ごみ」は法令上、事業系一般廃棄物または家庭系一般廃棄物として取り扱われることが多い。一般廃棄物の処理責任は自治体にあることから、観光ごみの量や質は、場合によっては自治体の廃棄物行政に大きく影響する。学会誌で、環境省統計を使って1人・1日あたりのごみ排出量(ごみ排出原単位)の大きい自治体から50自治体ほど並べてみたところ、温泉地や保養地、景勝地、島嶼、スキー場やリゾートとして有名な自治体が多くみられた。例えば2013(平成25)年実績では、全国平均の958g/日・人に対して、いずれも1,350g/日・人以上であり、また2,000g/日・人超の自治体も8自治体あった。このように排出原単位が大きく、観光地を有する自治体の「ごみ処理基本計画」では、観光ごみを考慮した減量化対策やごみ処理施設整備計画が検討されているのではないかと考え、学会誌ではインターネットでわかる範囲でいくつかの観光地を有する自治体の取り組みも紹介した。詳しくは、学会誌を参照願いたい。

本稿執筆にあたって、それらの自治体、あるいはごみ排出原単位が大きく、観光地を有する自治体を実際に訪問し、紹介しなかったところであるが、それはまた次の機会に譲ることとし、今回は、筆者が一観光客として訪れた

次の3カ所の取り組みを紹介する。

3 長野県上田市

NHK大河ドラマ「真田丸」の人気は高く、本稿執筆時(2016年10月)はいよいよ大坂の陣に向けて真田幸村(信繁)が大坂城入城を果たし、総合視聴率は20%超といわれている。

「真田といえば上田城!」ということで、2016年7月に家族旅行を兼ねて、信州上田を訪ねてみた。

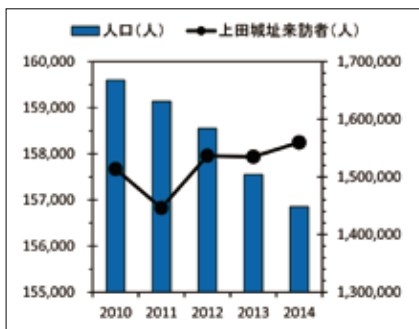
「おかげ様で、今年はかなりの観光客に来ていただいています」。

これは、私たちが上田城入城(?)の前に立ち寄った真田の郷の観光案内所「ゆきむら夢工房」で聞いた話である。果たして、どれくらい観光客だろうか？

「上田市の統計」の2014(平成26)年版より、2010(平成22)年度から2014(平成26)年度にかけての上田市の人口と上田城跡来訪者数の推移を図1に示した。人口はわずかながらも年々減少傾向がみられる反面、来訪者数は2011(平成23)年度以降増加傾向にあり、2014(平

図1 上田市の人口と上田城跡来訪者数の推移

出典：上田市提供資料による



成26)年度は年間156万人となっている。

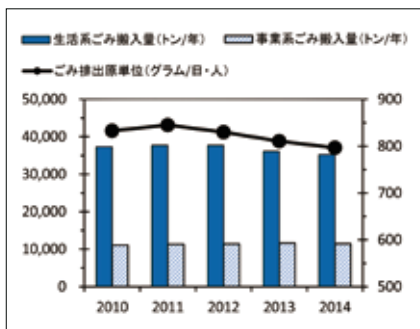
本稿執筆時点では、まだ来訪者数への「真田丸」効果は統計的に整理されていない。しかしながら、上田城内で開催されている「大河ドラマ館」の入館者数が、1月17日の開館以来、当所の年間目標50万人を大幅に上回って、10月1日までの8ヵ月半の期間で70万人を達成したことを考えれば、来訪者の勢いはまさに怒涛の如くであろう。

ところが、これらの観光客の増加は、現状の上田市のごみ処理体制にそれほど影響はしないようである。

先ほどの年間来訪者数を単純に日割りすると、一日あたり約4,300人。これは、人口比で2~3%程度であり、上田市としても特に「観光ごみ」に着目したごみ処理政策はとっていない。図2に2010(平成22)年度から2014(平成26)年度にかけての上田市のごみ排出量(生活系、事業系別)とごみ排出原単位の推移を示すが、実は上田市のごみ排出原単位は2014(平成26)年度実績で796g/日人であり、前述の全国平均よりもかなり小さい。

図2 上田市におけるごみ排出量と排出原単位の推移

出典：上田市提供資料による



長野県では「“チャレンジ800”ごみ減量推進事業」として、ごみ排出原単位を2017(平成29)年度に800g/日人以下とすることを目指しており、上田市はその先陣を切っていることになる。さすがは「真田の大殿」の郷である。上田市を含む上田地域広域連合による2016(平成28)年発行の「ごみ処理広域化計画」においても、「観光ごみ」を区分した取り組みは記載されていないが、現状の可燃ごみ組成から、とりわけ紙・布類、厨芥類、木・竹類の減量化施策を構成市町村で立案し、実行することになっている。また、この減量化目標値に応じて将来の資源循環型施設の焼却処理能力を算定しているが、この焼却規模には、突発的な地震や大雨に伴うある程度の災害廃棄物の処理量も見込まれていることから、来訪客による観光ごみの変動に対する弾力性はあると考えられる。

上田市では、観光客が排出するごみ対策だけでなく、その「観光おもてなし宣言(上田商工会議所)」の一つに「ゴミ一つないキレイなまちでお迎えします！」が掲げられており、日々、観光地の美化・清掃に努めている。「ぬかりはござらん、いつでも参られよ！」という万全の陣構えなのであろう。



ごみ一つ落ちていない上田城跡(尼ヶ淵から南櫓を望む)

なお、余談であるが、上田観光を終えた筆者家族はその夜、松本市に抜ける山間の鹿教湯温泉で一泊したが、その入口では「ゴミ無し文殊菩薩」が出迎えてくれた。これはポイ捨て禁止を呼びかけるために、「上小地域廃棄物不法投棄対策協議会」によって2014(平成26)年に設置されたものとのことである。



ゴミ無し文殊菩薩(鹿教湯温泉)

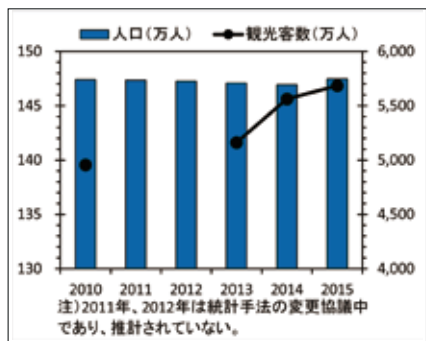
4 京都府京都市

まだ残暑厳しい9月、学会誌でも紹介した日本最大級の観光都市、京都市を訪れた。上田市と同様に、人口や観光客数、ごみ排出量といったデータを図3、図4に整理してみた。

京都市の人口は、ここ数年は147万

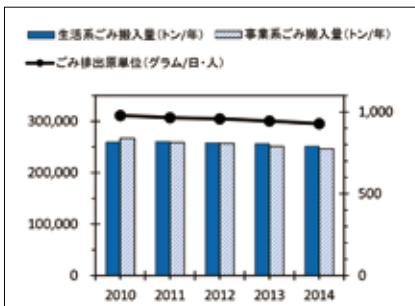
図3京都市の人口と観光客数の推移

出典：京都市提供資料による



人前後で推移しているのに対して、観光客は増加傾向にあり、2015(平成27)年は年間5,684万人となっている。単純に計算すれば一日あたり15万人強、人口の1割程度となる。その内、年間宿泊客数は1,362万人で、全体では前年比で1.6%増であるが、外国人宿泊客数に着目すると、前年度比72.7%と大幅増で316万人に達したとのことである。

図4 京都市におけるごみ排出量と排出原単位の推移
出典：京都市提供資料による



ごみ排出量もごみ排出原単位も年々減少傾向にあるが、生活系ごみと事業系ごみの排出量がほぼ同量であることが特徴といえる。京都市でも宿泊施設や飲食店、観光施設等から排出される「観光ごみ」は「事業系ごみ」として取り扱われることから、増え続ける観光客による事業系ごみ量への影響が気になるところである。同市は2015(平成27)年に「京都市廃棄物の減量及び適正処理等に関する条例(愛称：しまつのこころ条例)」を改正し、2R(リデュース・リユース)と分別・リサイクルの促進を柱として、ごみ減量を一層推進することとしている。この条例改正を受けて事業者向けに発行された「2R実践ガイドブック(図5)」によると、ごみ

減量に重点的に取り組む6つの分野が掲げられ、それぞれ実施義務と努力義務が定められている。



図5 2R実践ガイドブック

例えば「観光等」の分野では、ホテル・旅館業者の実施義務は「宿泊者への分別排出環境の提供あるいは分別の必要性の周知」となっている。また努力義務としては、土産販売店等での簡易包装と贈答用品の併売や、宿泊施設での使い捨てアメニティグッズの提供抑制などが定められている。一定規模以上の事業者はこれらの活動の実施状況について、年に一回、市に報告することとなっている。

その他のユニークな取り組みとして、「京都エコ修学旅行」という取り組みが行われている。これは、全国の修学旅行生の約3人に1人、中学生では約3人に2人が京都を訪れているといわれる中、その修学旅行中に①歯ブラシの持参、②エコバッグの携帯、③食べ残しを出さない、という宣言書をもって応募、参加してもらう取り組みであり、オリジナルのエコバッグが提

供される。

このようにたゆまなくごみ減量化に取り組む観光都市「京都」の姿勢と取り組みは全国の観光地にとって貴重な参考事例となろう。

京都は筆者にとって30年以上前に学生時代を過ごした懐かしい町である。多くの観光客の流れに身をまかせ、少し京都を散策して帰途についた。



花小路前の四条通に設置された市のごみ箱。観光客がひっきりなしにごみを投入していた

5 クルーガー国立公園

上田と京都を訪れた間の8月、筆者はモザンビーク国の首都、マプトにいた。そこから車で約5時間、国境を越え、

隣国、南アフリカ共和国の、学会誌でも紹介したクルーガー国立公園内のリサイクル施設を実際に見に行った(図6)。日曜の訪問にもかかわらず、同公園の水・廃棄物管理部長のベンさんいろいろな貴重な話を伺うことができた。同公園ではキャンプごとにごみの回収・処理を行っていたが、1994年から公園の南部地域(南部だけでも山形県ほどの広さである)の全てのキャンプのごみをスクーザキャンプに集約する方式とし、2014年には民間支援によりリサイクル施設を整備して、分別回収とごみ減量化に取り組んでいる。なお、他の国立公園では回収したごみの処理は基本的に近隣自治体に依存しており、自己処理を行っているのはクルーガーのみとのこと。回収は週2回で、一回あたり約80～100m³のごみを受け入れている。施設の運転時間は月曜～土曜は午前7時～午後4時、日曜は正午までと毎日稼働しており、監督員含めて31名の職員が働いている。彼らのほとんどは地元雇用である。また、



図6 クルーガー国立公園の位置



図7 クルーガー国立公園の資源・ごみ回収・処理フロー

現在、第2フェーズとして可燃ごみを固形燃料化し、ボイラー燃料として活用する施設整備を計画中的のこと。分別回収と資源化のフローを図7に示す。回収資源売却による収益は年間約30万ランド(約230万円)であり、施設の維持管理費削減の一助になっている。

このようにハード面での仕組みは整ったものの、大きな悩みの種は、せっかくの分別ルールがほとんど守られないことである。このため、結局、選別コンテナ前の分別ピットでは資源とごみの回収袋はミックスされてしまっている。「来訪者、特に大人に対して分別を周知していくことが課題だ!」と語るベン氏の顔が印象的であった。

6 おわりに

なにやら筆者のひと夏の紀行文のようになってしまったが、共通して感じたのは、来訪者を増やそうと知恵を絞る観光担当部局と、その来訪者の出すごみや資源への対策に知恵を絞るごみ担当部局のコミュニケーションの大切

さだった。まずは、身内を知ることが肝要である。インフラを含む観光ごみに対する適正な仕組みは、いわば「縁の下のおもてなし」であろう。くわえてお客様を迎える「おもてなしの心」としては、「何も気を使わないでください。ごみはそのまま出してください」とするのか、「私たちの街にはごみのルールがあります。文化ともいえます。皆さんも是非、ご理解の上、ご協力ください」とするのか、意見はさまざまであろうが、私個人としては後者かな?と思う。拡大観光者責任とでもいえばよいだろうか。今後、ますます増えると予測されている外国人観光客。全ての航空会社の機内誌に日本のいろいろな観光地の紹介とともに「BunBetsu, NIPPON!」と発信するのも、一つの日本文化の紹介になるであろう。

末筆ながら、本稿執筆にご協力いただいた上田市と京都市、そしてクルーガー国立公園のご担当者に厚く御礼申し上げます。次第である。